

教職大学院 Newsletter No.184

福井大学大学院 福井大学・岐阜聖徳学園大学・富山国際大学連合教職開発研究科 since 2008.4 2024.07.06

実践し省察するコミュニティ 実践研究 福井ラウンドテーブル 2024 HYBRID (対面-Online) SUMMER SESSIONS 特集号

実践し 省察する コミュニティ

Round Tables:
Summer Sessions 2024
for Reflective Practice
and Organizational Learning
in University of Fukui

For Communities of Practice and Reflection, since 2001

実践研究 福井ラウンドテーブル
2024 Summer Sessions
7/6(sat) 9:00-17:40
7/7(sun) 9:00-12:10
福井大学総合研究棟V (教育系1号館) 総合研究棟
online-offline hybrid sessions with Zoom

探究する学びを実現する教師
教師の実践力を培う学校拠点
教師を支える教職大学院の実践研究

学校と大学/
実践と研究を結ぶ
新しい実践研究組織とそのネットワーク

2024.7.6-7

教師教育改革コラボレーション/福井大学連合教職大学院
福井大学大学院 福井大学・岐阜聖徳学園大学・富山国際大学連合教職開発研究科
後援 福井県教育委員会

online-offline hybrid sessions with Zoom

内容

- 世界に広がるラウンドテーブル (2)
- 全体スケジュール (3)
- Keynote Session (Session I)**
教職大学院改革特別フォーラム (4)
- Round Table Cross Sessions (Session II)** (6)
- Zone Session (Session III)**
 - Zone A** 学校 (7)
 - Zone B** 教師教育 (8)
 - Zone C** コミュニティ (9)
 - Zone D** International (11)
 - Zone E** 探究 (12)
 - Zone F** インクルーシブ教育 (13)
- 実践し省察するコミュニティを結び支える (14)
- ラウンドテーブルの歩み (16)
- 福井大学連合教職大学院が実践する教育改革
グローバルコミュニティへの誘い (18)
- アーカイブ (20)

2001年3月、21世紀とともに始まった実践研究福井ラウンドテーブルは、今回2024年7月の開催をもって47回を迎えます。今回のラウンドテーブルも、多様な実践と省察との出会いに満ちています。今回は、ハイブリッド(対面-Online)にてSUMMER SESSIONSを開催いたします。7月6日(土)には教職大学院改革特別フォーラムと小グループ(5-6名程度)で実践を丁寧に語り聴き合うROUND TABLE CROSS SESSIONSを、7月7日(日)には3つのテーマに即したZONE SESSIONSを行います(Zone Dは6/29、Zone Cは7/13開催)。

この2日間が、お互いの成長を支え合い、大人も子どもも育ち合うコミュニティになることを、スタッフ一同大いに期待しております。

世界に広がるラウンドテーブル

福井大学大学院 福井大学・岐阜聖徳学園大学・富山国際大学連合教職開発研究科

准教授 高阪 将人

2001年3月に始まり、今回で47回目を迎える「実践研究福井ラウンドテーブル」。私がはじめて参加したのは、福井大学に着任後の2017年6月でした。それまでは、ラウンドテーブルとは無縁の世界で生きていたため、ラウンドテーブルの意味を捉えることが難しかったです。7年経った現在、少しずつその意味を実感し、より多様な参加者による実践交流の場になるよう、主にアフリカのマラウイにて活動に取り組んでいます。

これまでマラウイでは、知識伝達型の研修が主流でした。しかし、伝達される知識が現場のニーズに合っていない、また伝達される過程で内容が異なってしまうといった課題に直面していました。そこで、2017年に30名程度の参加者でラウンドテーブルがスタートしました。翌年には、マラウイの教育科学技術省が実施する教員研修にラウンドテーブルが取り入れられました。そこでは、約300名の参加者が、異なる地域の5～6名でグループをつくり、実践の交流を行いました。はじめは戸惑いを見せていた参加者も次第に顔を寄せ合い、膝をつき合わせ、年齢や性別、立場を超え自分たちの地域や学校の現状を熱心に報告し・聴き合う姿が見られました。また、課題の共有に留まらず、生徒の探究的な学習をどのようにデザインできるか等今後の展望を話し合うグループも複数見受けられました。さらに、近年では、その意味を実感した参加者が、マラウイからオンラインで「実践研究福井ラウンドテーブル」にも参加しています。

このような取り組みを通して、地域や職種が異なる実践者が集い、小グループに分かれお互いの実践を交流し、省察し、今後の展望を拓く、ラウンドテーブルの取り組みが世界においても求められていることを実感しています。「実践研究福井ラウンドテーブル」が、世界の実践者が実践を交流し、意味づけ、今後の展望を拓く場になればと思っています。



全体スケジュール

実践研究 福井ラウンドテーブル 2024 Summer Sessions

The 24th anniversary year of Round Table Cross Session
in University of Fukui since 2001

7/6(sat) 9:00-17:40 (zoom 接続開始 8:30)

Session I 教職大学院改革特別フォーラム 9:00-11:40 ※オンライン

「新たな教師の学び」を支える協働のために (6)

学び合うコミュニティを多重に編成する研修サイクル (2)

Session II Round Table Cross Sessions ※ハイブリット

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

①はじめに 12:40-13:00 ②自己紹介 13:00-13:20

③報告Ⅰ 13:20-15:00 ④報告Ⅱ 15:00-16:00 ⑤報告Ⅲ 16:00-17:40

地域や職場で自分たちの実践をじっくり跡づけ、その省察をふまえて実践を編み直していく。地域・職場を大人同士が実践を通して学び合う協働体（コミュニティ）に変えていく。その中で一人一人が、省察的で主体的な実践者としての力を培っていく。そうした地道な取り組みが少しずつ蓄積されてきています。

試行錯誤を重ねながら大切に進められてきているそうした取り組みを、より広く伝え合い、じっくり展開を聞き取り、学び合う場を作りたいと思います。

小グループで実践の展開を聴き合います。

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていきたいと思います。心に残っている場面。言葉、表情、行為。その時々を感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。

語られる展開に耳を傾け、活動の場面を共有し成長のプロセスを探っていきたいと思います。実践の過程をじっくり語り・聞きあう場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培われていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。

7/7(sun) 9:00-12:10 (zoom 接続開始 8:30) ※オンライン

Session III

学校・教育・地域を考える 5つのアプローチ 9:00-12:10

(Zone C, D は開催時間が異なります)

A 学校: 子どもの主体的な学びを支えるコミュニティ～子どもから学ぶプロセスを探究する～

B 教師教育: 教師教育について語り合う

～大学・行政・学校の連携・協働による実践コミュニティの醸成～

C コミュニティ: 持続可能なコミュニティをコーディネートする

～コミュニティの意義を再考する～ (15:00～)

D International: International Initiatives on Collaborative Learning

(6月29日 15:00-17:20)

Held on a different date. Please check the website. Will be updated soon.)

E 探究: 学びと教えのあたらしいビジョン～生きる力2.0をみんなで考える～

7/6 (Sat) 9:00-11:40 (オンラインの場合の接続開始 8:30)

実践研究福井ラウンドテーブル 2024 Summer Sessions

Keynote Session 教職大学院改革特別フォーラム

「新たな教師の学び」を支える協働のためにVI

学び合うコミュニティを培い支える営みを問い直す

学び合うコミュニティを多重に編成する研修サイクル（2）

新しい世代が、否応なく転換を遂げていく世界に協働の主体として参画していく力を培うことのできる学び、そのために求められる「主体的・対話的で深い学び」、協働探究・プロジェクト・コミュニケーションを通じた学びを、すべての人にひらかれた公教育においてどのように実現していくのか。この喫緊の、そしてきわめて困難な課題に向けて、多くの国々で試行錯誤／悪戦苦闘が続いています。しかし、その試行錯誤とそれを通じた実践／研究を通して、この困難な改革の鍵が、中心的な担い手である教師自身の協働探究／「主体的・対話的で深い学び」の持続的な展開にあることが明らかになってきています。そして、学びの持続を支えるために、学び合うコミュニティとそのネットワークを培っていくことが不可欠であることが共有されてきています。

一昨年来、日本における教員研修のセンター、教師の学びを支える拠点である教職員支援機構において、教師自身の「主体的・対話的で深い学び」を支える探究型研修への取り組み・挑戦が始まり、本年度、さまざまな地域において探究型研修への取り組みが始まっています。こうした展開を受けて今回の特別フォーラムでは、学校において、また学校を超えて、学び合うコミュニティを培う営みに取り組まれている方々に、その展開とそこでのご自身の学びと省察を語っていただき、コミュニティを培う営みの意味とプロセスを、私たち自身の取り組みとも照らしながら聴き合い、共有してきたいと思っています。

教職員支援機構の目見田紋未さんには、機構の中で職員同士がどのように学びながら研修づくりを進めてきたのか、また、そうした営み・実践を通してご自身がどのように学んでこられたのかを語っていただきます。

福井市社北小学校校長の水野涼子さんからは、働き方改革が求められる状況の中で、お互いの取り組みを語り合い・聴き合う機会、互いの実践から学び合う機会をどのようにひらき、継続させていったのか、また、その展開を今どのように捉え返されているのかを語っていただきます。

最後に、日本の改革に学びつつ学習者主体の新たな学びの公立学校群をエジプトに創るプロジェクト（Egyptian Japanese School）の中心的な担い手の一人であるエジプト教育省アブルハッサンさんと3人の校長先生より、学校での実践を通じた学びを支える学校間コミュニティの企図について紹介していただきます。

学び合うコミュニティを培い結ぶ取り組みを内部で支えている方々の報告と省察をお聞きしながら、その意味と可能性、そして課題と展望を探り、私たち自身の取り組みの今後の展開に活かしていきたいと思っています。

9:00-9:15 趣旨説明

9:15-9:40 報告 1 : NITS における協働コミュニティの展開

独立行政法人 教職員支援機構 教職員の学び協働開発部 主任 目見田 紋未

9:40-10:05 報告 2 : 語り合い・学び合いを生み出す校内研修

福井市社北小学校 校長 水野 涼子

10:05-10:30 報告 3 : 学校を結び、学び合うコミュニティを培う

——エジプトにおける教育改革の最前線からの報告

エジプト教育省 Project Management Unit 専門官（特活担当） アブルハッサン・アシュリー

EJS Kafr Batikh 校長 イブラヒーム・ヒンダーウィ

EJS Gamasa 校長 アナス・マハムード

EJS New Damietta 校長 アハメド・アブドウルバーキー

10:30-10:45 省察と展望

福井大学大学院連合教職開発研究科 特命教授 柳沢 昌一

10:50-11:40 グループ対話

（報告を聞いての感想とご自身の取り組みをご紹介します）

〈コーディネーター〉 福井大学大学院連合教職開発研究科 准教授 遠藤 貴広

Round Table Cross Sessions

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

【対面】		【オンライン】		【はじめに】 ラウンドテーブルの意味、めざしていること、進め方について確認します。それぞれがいま取り組んでいること、ラウンドテーブルに期待していることを伝え合います。 【報告】 グループによっては、報告者が二人の場合があります。その場合には、報告者以外のメンバーからも、それぞれの職場や地域・学校での取り組みを紹介してください。 報告Ⅲのあと、もし時間が許すようであれば、今日の感想をお互いに語ってグループごとに会を閉じます。部屋ごとのまとめ等は行いません。
①はじめに	12:40-13:00	①はじめに	12:40-13:00	
②自己紹介	13:00-13:20	②自己紹介	13:00-13:20	
③報告Ⅰ	13:20-15:00	③報告Ⅰ	13:20-15:00	
④報告Ⅱ	15:00-16:00	④報告Ⅱ	15:00-16:00	
⑤報告Ⅲ	16:00-17:40	⑤報告Ⅲ	16:00-17:40	

地域や職場で自分たちの実践をじっくり跡づけ、その省察をふまえて実践を編み直していく。地域・職場を大人同士が実践を通して学び合う協働体（コミュニティ）に変えていく。その中で一人一人が、省察的で主体的な実践者としての力を培っていく。そうした地道な取り組みが少しずつ蓄積されてきています。

試行錯誤を重ねながら大切に進められてきているそうした取り組みを、より広く伝え合い、じっくり展開を聴き取り、学び合う場を作りたいと思います。

小グループで実践の展開を聴き合います。

実践記録を土台に実践の歩みをじっくり語っていきたいと思います。心に残っている場面。言葉、表情、行為。その時々感じていたこと。ふりかえる中で見えてきたつながり。話し合いと記録づくりの中ではじめて気づいたこと。いま改めて跡づけ直して考えていること。

語られる展開に耳を傾け、活動の場面を共有し成長のプロセスを探っていきたいと思います。実践の過程をじっくり語り・聴き合う場、実践を共有して協働探究できる関係がより広く培われていくことが、その後の実践への問いの深まりを支える拠り所になると思います。

実践の展開、そこで考えてきたことをじっくり語っていただき、その展開をたどります。話の間にも小さな確認の質問なども挟んで、やりとりしながら進めることができたと思います。

7 / 7 (Sun) 9:00-12:10 (ZOOM 接続開始 8:30) ※オンライン

Zone Session 学校・教育・地域を考える 5 つのアプローチ

(Zone C, D は開催時間が異なります)

Zone A 学校

テーマ：子どもの主体的な学びを支えるコミュニティ

～子どもから学ぶプロセスを探究する～

zone Aではこれまで「21世紀の学びを実践するコミュニティ」をテーマとして掲げ、子どもの学びのプロセスを大事にしながら活動を展開していくことについて考えてきました。「主体的・対話的で深い学び」と同時に「チーム学校」「こどもまんなか社会」「co-agency」といったことが提起されてきたように、今、子どもたちが主体的に学びを深めていくために、学校や園、そして地域が子どもたちを支えていくことが求められています。そのためには、子どもの声や姿を真摯にとらえて、子どもから学ぶプロセスを探究し、時に自分を変えようとする大人の姿勢が必要不可欠です。私たちは、そうした子どもとともに、あるいは子どもから学ぶ場を、どう組織していけばよいのでしょうか。

前回のシンポジウムでは、子どもたちと教師が一体となって取り組んだ学級総合や、遊びの中で確かな学びを培っていく子どもたちと、それを支える保育士集団の姿が語られました。その中で、私たちは自身の「授業づくり観」を変える必要性を痛感しました。これまで「教える専門家」であった教師は「学びを組織する専門家」を目指していく必要があることをあらためて感じるとともに、子どもたちとともに学ぶために、教師は何をどこまで支援すべきか、組織すべきかといった新たな課題も見えてきました。

今回のシンポジウムでは、さまざまなアプローチで子どもたちに向き合うことで、実践の改善を試みてきたこども園と中学校の取り組みを語っていただきます。こども園の実践では、子どもたちの思いを引き出し、保育者同士が省察を重ねながら活動を展開していったプロセスを、また中学校の実践では、授業研究会の場に生徒にも参画してもらい、学校での学びを教師と生徒で共に創っていくプロセスを報告していただきます。幼児教育から高等教育まで一貫して重要とされている「主体的な学び」を、子どもとの関係の中でどのようにして組織していくことができるのか。今回は「子どもから学ぶプロセス」を視点にして、参加者の皆様と一緒に探っていききたいと思います。

Connection	8:30-9:00	オンライン接続
Orientation	9:00-9:10	オリエンテーション
Session I	9:10-12:10	
Symposium	「子どもの主体的な学びを支えるコミュニティ」 ～子どもから学ぶプロセスを探究する～	

<シンポジウム>		<シンポジスト>	
9:10-9:40	愛慈福祉会 きたこども園	保育教諭	水谷 友梨
9:40-10:10	福井大学附属義務教育学校	教諭	河合 創

<全体討議>	10:10-10:45
<コメンテーター>	福井県教育庁高校教育課 参事 (兼 福井大学教職大学院客員准教授) 渡邊 久暢

私たちは、「主体的な学び」を子どもとの相互作用を通してどのように組織していくことができるのか、話題提供をふまえて皆様とともに探っていきます。

<休憩> 10:45-11:00

Session II 11:00-12:10 Cross-session(Breakout Room)

Session I の議論に基づき、参加者それぞれの学校づくりの長い実践を共有し、新たな出会いと協働を編み込んでいきます。校種等をクロスした小グループ形式での対話を編み込み、実践をデザインし、展望を生み出します。

Zone B 教師教育

教師教育について語り合う

～大学・行政・学校の連携・協働による実践コミュニティの醸成～

今日の学校教育においては、変化の激しい時代の中で持続可能な社会の創り手となる子どもたちの資質・能力を育むため、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた、教育の質的転換・向上が大きな課題となっています。教師は主体的・継続的に学び、協働して力量を高めていながら、互恵的に学び合い高め合う組織づくりにも一層取り組んでいく必要があります。

また、学校、地域、大学、自治体をつないだ広いコミュニティの重奏の中で、子どもと教師が共に学び合う学校組織の在り方が求められています。

Zone B「教師教育」では、大学・行政・学校が目指すべき方向を共にし、生涯にわたる教師教育のあり方について考えていきたいと思います。多くの皆さまのご参加をお待ちしております。

なお、今回はオンラインで実施します。

Session I

9:00～ 9:10	イントロダクション
9:10～ 9:55(45 分)	山形大学教職大学院より話題提供および質疑
9:55～10:05	休憩
10:05～10:50(45 分)	嶺南教育事務所より話題提供および質疑
10:50～11:10(20 分)	NITS より2つの報告についてコメント
11:10～11:20	休憩

Session II

11:20～12:10(50 分)	フォーラム(グループ協議) 実践報告を踏まえ、参加者それぞれが今後の取組にどのように生かし、つなげることができるか、小グループで協議します。
-------------------	---

Zone C コミュニティ

持続可能なコミュニティをコーディネートする

～コミュニティの意義を再考する～

対話へのお誘い

毎年のように起こる自然災害、そのたびにコミュニティの重要性がクローズアップされます。今年の元旦に発生した能登半島地震では、地域の人のつながりで救われた命もたくさんあったと聞きました。このように災害時のコミュニティの必要性はだれにも認識されていることでしょう。コロナ禍であっても、つながりを保つためにみんなで工夫し、コミュニティを持続させてきていました。

このように、人間が安心して学び、働き、充実した人生を送るためには、人が人を育てる安全で安定したコミュニティが必要なことは多くの人が認めるところです。

しかし、普段私たちが積極的にコミュニティに関わるかと言えば、必ずしもそうではありません。今、私たちの身近にあるコミュニティは、私たちや地域の方々にとって、どんな意義をもつのでしょうか？改めて考えてみましょう。

これまでの経緯

Zone C はこれまで「持続可能なコミュニティをコーディネートする」をテーマに様々な実践を聞きつつ語り合ってきました。人口減少や都市化などの急激な変化の下、公民館や地域のまちづくり協議会などがリーダーとなって行っている地域活性化の活動や、担い手不足や高齢化などに対応するため外部の方や若者を取り込んだ活動、地域と連携した小中学校へのキャリア教育など、様々な実践を通して新たなコミュニティのあり方を模索してきました。また、そのような活動を行っている方々の生き方や思いにも焦点を当ててきました。そこから「三方よし（自分よし、相手よし、地域よし）」を学んだようにも思います。

前回は、美浜町の小学生が児童の目線で地域の価値や課題を考え、自分たちにできることを活動として行ってきた実践を聞きました。それが中学校、高校の探究学習へとつながり、そして、子どもたちの思いを支援し、共に歩もうとする輪が地域や行政へと広がっていく様子が語られました。このような「世代や立場を超えたつながりの広がり」が、どのように実現してきたのか、その継続的で発展的な過程を知ることで、地域の中でのコミュニティの新しい価値を共有しました。また、これからは地域の方々だけでなく、学校や行政も地域コミュニティの構成員の1つだということにも気づかせてくれました。

今回のゲスト

4月25日の新聞では、福井県内の8つの自治体が将来的に「消滅可能性がある」と人口戦略会議が伝えていました。このような状況の中で、地域の文化や伝統、つながりを大事にするコミュニティはどうすれば持続可能になるのでしょうか。

今回は、以前、福井の学生まちづくり班の高校生プレーヤーとして若者の視点から街の活性化を図る取り組みを実践しておられた大学生、また、学校で教員の仕事をしながらも地域の一住民として地区の青年団の活動やPTA活動などに積極的に関わっていらっしゃる方から、それぞれの活動への思いを伺います。そして、参加者みなさん一人一人もゲストとして、私たち一人一人にとってのコミュニティの意義を再考できたらと考えています。

参加者一人一人が、自らの活動を通して感じるコミュニティに対する思いを語り合う中で新たな価値を見出してみませんか。このような場で、人々が集い、課題を共有し、対話を重ねることでの気づきが明日からの力になっていくものと考えます。

15：00～15：10 趣旨説明 水野幸郎

15：10～15：40 ゲストからの話題提供 コーディネーター：大橋巖

15：40～16：10 小グループでの話し合い

16：10～16：20 休憩（チャットタイム）

16：20～16：50 全体共有 全体ファシリテーター：富永良史

16：50～17：20 小グループでの話し合い

17：20～17：40 全体共有と振り返り

Zone D International 6/29 実施

International Initiatives on Collaborative Learning: Teacher Education and Professional Development

The Fukui Roundtable is held semi-annually in February and June. The Roundtable consists of six zones (A, B, C, D, E, F). Zone D International provides a platform for collaborative learning on practices and future prospects for teacher education reform inside and outside Japan.

The University of Fukui has been accepting a large number of foreign students who are engaged in teacher education through collaborative learning and has been maintaining its ties with the past foreign students by inviting them to the Roundtable to share their previous and current practices with practitioners from different countries. Moreover, since 2021, as part of its global development, the University of Fukui has been focusing on the Nalikule College of Education and its demonstration school in the Republic of Malawi and following the process of their reflective lesson study. We will continuously be looking forward to more collaborative co-inquiry learning between teachers from different countries to develop new learning methods for better education for children.

This Zone will consist of two sessions; Symposium and “Roundtable.” In the symposium, the symposiasts will discuss the proposed approaches, results, and challenges in their contexts. In the “Roundtable,” educators from various countries will share their practice and learn from each other in small group discussions. We hope that these examples will encourage you to reflect upon your own practices. These sessions will also be translated into Japanese.

Zone D では、実践における協働的な学びのプラットフォームを提供し、国内外の教員養成の展望を拓くことを目的とし、世界各国の教育関係者と実践や学びを共有し、捉え直しを行っています。

福井大学教職大学院では、世界各国からの留学生を受け入れています。福井ラウンドテーブルでは、探究型学習を通じた教師教育を受けた留学生が帰国後の授業実践の報告も行っています。加えて、2021 年からは、福井大学が行っているマラウイ共和国のナリクレ教員養成大学及び附属高校と協働・連携し、子ども中心の授業や協働探究学習について語り合ってきました。今回も引き続き、世界各国の様々な実践を聴き合う中でより良い子どもたちの学びについて探ります。この Zone においてはシンポジウムでの事例紹介とラウンドテーブルでの議論を通して、参加者自身の実践と省察が深まることが期待されます。

なお、本セッションは英語での議論となりますが、[日-英の通訳を行います](#)ので、ご希望の方は、申し込みの際に通訳希望としていただき、当日は通訳用の Zoom に接続するためのデバイスを[別途](#)ご用意ください。

Date: 29th June

<i>Session I</i>	15:00-15:40	<i>Symposium</i>
< Symposiast >		Lesson Study in Nalikule Demonstration Secondary School, Malawi Mr. Francisco Mitumba, Nalikule Demonstration Secondary School
< Moderator >		Mr. William Tjipto, University of Fukui
<i>Session II</i>	16:00-17:00	<i>Roundtable</i> Sharing and learning from each other's practices in small groups. The following guest speakers are placed in each group: Ms. Suzan Youssef Mohamed Madany & Mona Elshahat (Egypt) Mr. Santamaria Juan Florencio (USA) Mr. SMIT Felix (Zambia)
<i>Closing</i>	17:10-17:20	Ms. ISHII Kyoko

Zone E 探究

Zone E 探究 学びと教えのあたらしいビジョン～生きる力 2.0 をみんなで考える～

Zone E 探究ではこれまで、「学びと教えのあたらしいすがたカタチ（ニューノーマル）」をテーマにして、子どもたち・若者たちと大人たちが世代を越えて協働探究してきました。

今回のセッションでは、これまでの協働探究をふまえながら「学びと教えのあたらしいビジョン～生きる力 2.0 をみんなで考える～」をテーマに設定し、いま、そしてこれから先の未来で子どもたち・若者たち・大人たちがよりよく生きるための「力」を参会いただくみなさまと一緒に探っていきます。

日程 7月7日（日）9:00-12:10 会場 オンライン Zoom（入室 8:30 より）

9:00- 9:10	ウェルカム&イントロダクション
9:10- 9:40	アイスブレイク
9:40-10:20	ワーク1：わたしにとっての大事なチカラを考える
10:20-10:30	休憩
10:30-10:50	シェア
10:50-11:30	ワーク2：生きる力 2.0 を考える
11:30-11:40	生きる力 2.0 をデッサンする

Zone F インクルーシブ教育

ZoneF 開催見送りのお知らせ

共生社会の実現、多文化共生、ダイバーシティの推進など、多様性が尊重される社会の実現は、我が国における一つの大きな課題となっています。多様性の尊重はマイノリティや社会的弱者といった一部の人々に関する問題としてクローズアップされがちですが、そもそも、私たちはみなそれぞれがユニークな存在であり、多様性を彩る一員です。つまり、多様性が尊重される社会とは、全ての人があるがままに生きることが大切にされる社会に他なりません。そうした意味でのインクルーシブな社会の実現には、全ての子どもがあるがままの存在として生き、育つことのできる教育の取り組みが不可欠です。この困難な課題に立ち向かうため、実践研究福井ラウンドテーブル 2021 Spring Sessions において「ZoneF インクルーシブ教育」は立ち上がりました。そして、実践研究福井ラウンドテーブル 2021 Summer Sessions 以降は、『ZoneA 学校』とのコラボレーションによって、多様な背景や困り感を持つ子どもも含めたすべての子どもが、あるがままの存在として生き、育つことのできる学校教育の在り方を探究してきました。その中で、一人ひとりの子どもに寄り添うこと、子どもの視点から学校の当たり前を問い直すことの重要性を再確認してきました。

多くの子ども達が共に学ぶ学校の中で、一人ひとりの子どもの思いを深く共有するのは容易なことではありません。しかし、一人ひとりの子どもに寄り添うためには、そして子どもの視点から学校や社会の当たり前を問い直すためには、一人ひとりの子どもの世界を知ろうとするまなざしを持つことが不可欠です。そこで、前回の実践研究福井ラウンドテーブル 2024 Spring Sessions では、ZoneF として『『個』の視点から教育を再考するー子どもと教師の接面を探るー』というテーマを掲げ、シンポジウム・フォーラムを開催しました。シンポジウムでは2名の方に話題提供をお願いし、それぞれの場で生きる個別具体的な子どもの姿を共有することを通じて、子どもの視点から学校や教育のあり方を探ってきました。いずれの話題提供においても、子どもが自己を位置づけることのできるコミュニティの存在の重要性が示され、そうした視点を踏まえながら、この間、実践研究福井ラウンドテーブル 2024 Summer Session の準備を進めてまいりました。

しかし、今回の実践研究福井ラウンドテーブル 2024 Summer Sessions は、諸般の事情により Zone ごとのセッションを全面オンラインで開催することとなりました。上述のように、ZoneF では個別具体的な子どもの姿を共有すること抜きに探究を進めることはできません。今を生きる子どもたちの具体の姿をより深く共有するためには、参加者の皆様と場を共有し、対面にてじっくり語り合うことが極めて重要であると考えております。そのため、オンラインの制約等を考慮し、今回の ZoneF の開催は見送ることいたしました。

現在、ZoneF では、来年2月に予定されている実践研究福井ラウンドテーブル 2025 Spring Sessions での対面開催に向けて準備を進めております。今回、ZoneF への参加をご検討いただいていた皆様には大変申し訳ありませんが、2月の実践研究福井ラウンドテーブル 2025 Spring Sessions へのご参加をお待ちしております。

Round Table Cross Sessions

ラウンドテーブル

実践し省察するコミュニティを結び支える

2009.3.26

地域も職種も異なる実践者・実践研究者が集い、小グループに分かれてテーブルを囲み、5時間近く互いの実践を跡づける報告に耳を傾ける。語られる実践の展開を迫走しながら、時々の実践者の判断や配慮、実践を支える条件に問いを進める。聴き手の問いに応え、語り手は実践の状況とそこでの思考を改めて思い起こし、それを表す言葉を模索しながら語り進めていく。聴き手もその展開に学びながら、関連する自らの実践とそこでの経験・思考を語り始める。それぞれの経験が照らし合うことによって共通する構造とそれぞれの特色が浮かびあがる。

少人数で、しかも多様な専門職が集って一緒に実践の長い展開を跡づけ直すこの研究会（実践研究福井ラウンドテーブル、以下ラウンドテーブルと略す）の構成とその意味について、この会に最初から関わってきたものの一人として改めて考えてみたい。

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

一つの授業、一つのプロジェクトも、それが生み出される背景と、それが生きて働く作用の行方まで視界に入れようとするならば、はるかに長い前後の展開を跡づけることが必要となってくる。とりわけ学習者の成長のゆるやかなプロセスを焦点とする教育実践においては、そうした長い展開から目を逸らす訳には行かない。

しかし、個々の授業や実践の検討は数多く重ねられ、また他方でより長いライフヒストリーの跡づけもまた重ねられてきてはいるが、その間にある実践の持続的な展開、実践と実践の間にある調整と成長の長いプロセスへの問いは課題のままに残されてきた。たしかに、そうならざるを得ない理由がいくつも存在している。実践をともに担っているもの同士では、つねにその状況の中にいるために、問題や課題については話し合ったとしても、実践の展開と状況を子細に語る必要性が存在していない。逆にその実践の外に 있는ものは、その実践から学ぼうとする場合であっても、自分の実践にすぐに活かせるような具体的な手がかりを求めがちである。そして「外から」実践に迫ろうとする「研究」は、実践の持続に見合うだけの方法も枠組みも組織も準備していない。長い実践の脈絡、そこにある成長のプロセスとそれを支える編成を探るためには、これまでにない実践交流の場・実践の内と外を結ぶ新しい協働の省察の場を生み出していく必要がある。実践の歩みを振り返り、その展開を跡づけ、一人ひとりの成長、自身の実践者としての歩みを問い直そうとする語り手と、その長い展開からより深く学び取ろうとする聴き手が出会う場が必要となる。ラウンドテーブルは、実践に関わる一人ひとりがそうした語り手となり、聴き手となる場を拓こうとする取り組みとして始まる。

実践と省察のサイクルとその交流の場

長い実践の展開を省察し検討することは、日々の仕事に追われるお互いにとっては容易に実現できることではない。実践の場において、実践の展開を語り合い省察するコミュニケーションを持続的に進めていく、専門職として学び合うコミュニティ（Professional Learning Communities）の実現が中心的な課題となる。そうした実践の場での省察を支えるために、福井大学教職大学院では学校拠点での実践カンファレンスを中心に据えている。そしてそうした学校での取り組みを踏まえ、月一回の合同のカンファレンス、実践を語る会を重ね、また半年ごとに集中的に実践の展開を記録化して検討する時間を作っている。月を追って、そして半年、1年、2年とそれぞれの取り組みの足取りを確かめていくなかで、それぞれの実践者の、そしてそれぞれの職場の固有のリズムで、ゆるやかに、ときに劇的に実践が展開していくことを実感し合うことになる。時々の実践の記録やカンファレンスでの語らいを、1年、そして2年と積み重ね、その記録を、長期にわたる実践の展開過程として改めてその道行き（trajectory）・脈絡を検討し直して行くなかで、厚みのある実践の現実の展開がようやく見えてくる。あれができないこれが足りないとその時々課題を追っている目には見えない、同じところを回っているようにしか見えない実践サイクルの中にある小さな傾斜が、長い時間の展望の中でとらえ直した時に、ゆるやかな展開として像を結んでくる。自身の見方や考え方の深まり、実践の基盤にある共同関係の展開も、そうした長期にわたる展開の中には

じめて浮かびあがってくる。

しかし、長期にわたる実践省察の意味が、その渦中では実感し難いという現実が動かしがたい。そうした暗中模索の中での実践と省察を支えるためにも、実践をともに歩み語り合う仲間とともに、長い実践の展開の価値を、より広い見地からより鮮明に確かめ直す場が、どうしても必要になってくる。ラウンドテーブルは、実践展開の価値をより広い視点から確かめ直す場として、実践の場での省察、そして大学院での長期的な実践研究を支える重要な支柱となっている。実践と研究の表明の場のゆたかさ、あるいは貧困さは、それが実践の真価を問う場の一つとして働くがゆえに、日々の実践と研究の深まりを支え、逆に拘束することにもなる。交流・表明の場のあり方、その構成が問われることになる。

小グループでの共同探求と開かれた交流を結ぶ

地域を越えた実践交流はこれまでも様々な組織によって取り組まれているが、交流の広がり確保と実践の探究の深まりとは、相反する要求であることもまた確かである。ラウンドテーブルは交流と探究を両立する形を模索する中で生まれてきた。いくつかの特徴的なセッションの構成がここでは取られている。

- ① 実践の長い展開を語り、聴くことを中心に据える。
- ② そのために実践の展開を語り跡づけることの出来る時間を確保する。(1 報告 60-100 分)
- ③ 実践の展開について問い交わしながら共同探求できる少人数のグループを設定する。(6 名程度)
- ④ グループには多様な地域・分野の実践者・研究者が加わり、個々のコミュニティを越えたメンバーで実践を共有し跡づける。(学校教育・社会教育・看護・福祉・保育・自治・企業 ほか)
- ⑤ 小グループは個別の部屋に分かれず、他のグループと広場を共有した状況の中で進める。

多様な地域・領域のメンバーが加わったセッションでは、自分たちが当たり前の前提にしていたこと、重要ではあってもその領域ではだれもが共有しているが故に明確に説明することを要しない前提を改めて語る必要が生じてくる。領域を越えた、しかも実践への問いを持つ人たちに伝える言葉を探る経験は、それぞれの専門職がパブリックな表現を鍛えていく機会として重要な意味を持つことを、ラウンドテーブルの実際の積み重ねを通して私たちは実感してきている。ラウンドテーブルというセッションは、各自の領域をクロスして実践を問い深めるチャンスとなり、そして専門家の文化をパブリックなコミュニケーションと結ぶ可能性を持っている。

パブリックなコミュニケーションという課題 持続を支える記録と機構

公共的なコミュニケーションと個別のコミュニティの価値を結ぶという大きすぎる課題は、しかし、民主社会における専門職、とりわけ公教育を担う専門職にとって避けて通ることの出来ない課題である。理念としてのみ語られることの多いこの課題に、ラウンドテーブルは、実効性のある手がかりを与える可能性があるのではないか。語り合う 34 の小さな渦、そこでの語らう声が輻輳する広場に一人の当事者として参加しながら、そして 20 名余の小さな実践交流からはじまったラウンドテーブルの 9 年の展開を振り返りながら、そう考えは始めている。

(柳澤 昌一 『教職大学院ニュースレター』 No.11 2009.3.31)

ラウンドテーブルの 4 重の意味

4 Dimensions of Round Table Cross Session for Reflection in and on Longitudinal Process of Practice

- I 長い実践の展開をともに跡づけ、省察する。
Co-reflection in and on longitudinal process of practice
- II 個々の実践コミュニティを超えて、実践の展開を探り、照らし合う。
Boundary crossing collaborative inquiries of longitudinal practice
I, II → 省察的実践者としてのモードを形成する上で不可欠のサイクル
- III 実践と実践、分野と分野を結びパブリックな省察的コミュニケーションの文化とコミュニティを培う。
Cultivating Communities of Public and Reflective Learning
- IV 省察的実践者としての専門職学習コミュニティを支える省察的機構へのチャレンジ
Challenge for Reflective Institution for Sustainable Development of Professional Learning Communities for Reflective Practitioners

実践研究福井ラウンドテーブルの歩み 2001.3-2024.2

2001.3.17-18	春のシンポジウム ラウンドテーブル 教師の実践的力量形成をめざして 木岡一明・寺岡英男(この回は教師教育をめぐる 20 人程度の研究会であり、実践を聴き合う会ではなかった)
2001.11.10-11	実践研究:福井ラウンドテーブル 省察的実践を支える協働(第 1 回) For Reflective Practice, Professional Development, and Organizational Learning. 第 1 回目の実践研究福井ラウンドテーブルが開催される(参加者 20 数名)。京都ユースホステル協会 福井市公民館主事 つむぎの会 ゆきんこ共同保育園 福井大学附属小学校 福井大学教育地域科学部児童館プロジェクト・探求ネットワーク
2002.3.16-17	実践研究・事例研究ラウンドテーブル(第 2 回) 高木展郎・大田邦朗・藤原文雄・石川英志 フレンドシップ事業福井ラウンドテーブル 同日開催 探求ネットワークのラウンドテーブル ～現在に至る
2002.7.13-14	実践研究:福井ラウンドテーブル(省察的実践を生み出す 学び合う組織を編む)(第 3 回)
2003.3.15-16	実践研究・事例研究ラウンドテーブル(第 4 回) シンポジウム 教師教育における専門職大学院の可能性を探る 辻野昭・葉養正明
2003.7.12-13	実践し省察するコミュニティ 実践研究:福井ラウンドテーブル(第 5 回)
2004.3.13-14	学校改革実践研究福井ラウンドテーブル(第 6 回) 秋田喜代美ほか
2004.7.3-4	実践し省察するコミュニティ: 実践研究福井ラウンドテーブル 2004 (第 7 回)
	2004.8 教育のアクションリサーチ研究会が始まる(於熱海～2009)
	2005.1 実践研究東京ラウンドテーブル始まる(於早稲田大学)～現在に至る
2005.3.5-6	学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2005(第 8 回 参加者 100 名超) 国際シンポジウム Ann Liebermann 横須賀薫 佐藤学 於国際交流会館
2005.7.9-10	実践研究福井ラウンドテーブル 2005 (第 9 回)
2006.3.4-5	学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2006 フェニックス・ブラザ (第 10 回) 田中孝彦・石川英志・新田正樹・上野ひろ美・白益民・松木健一・牧田秀昭
2006.7.1-2	実践研究福井ラウンドテーブル 2006 (第 11 回)三輪建二・倉持伸江・松木健一・水野篤夫 兼日本社会教育学会東海北陸研究集会
2007.3.3-4	学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2007(第 12 回)渡邊満・無藤隆・松木健一・新田正樹
	2007.4 福井大学教職大学院の準備期間が始まる
2007.6.30-7.1	実践研究福井ラウンドテーブル 2007 (第 13 回)藤本 寛巳・淵本幸嗣・寺岡英男
2008.3.1-2	学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2008(第 14 回)横須賀薫・新田正樹・松木健一・Jae-Hoon Yu
2008.6.28-29	実践研究福井ラウンドテーブル 2008(第 15 回)人見久城・筒井潤子・寺岡英男・岸野麻衣・向当誠隆
2009.2.28-3.1	学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2009 (第 16 回)稲垣忠彦
2009.6.27-28	実践研究福井ラウンドテーブル 2009(第 17 回)5 つの領域:専門職として学び合うコミュニティ (分野ごとのセッション始まる)
2010.2.27-28	学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2010 (第 18 回参加者 300 名前後)鈴木寛 Catherine Lewis
2010.6.26-27	実践研究福井ラウンドテーブル 2010(第 19 回):学校・コミュニティ・特別支援・医療看護
2011.2.26-27	学校改革実践研究福井ラウンドテーブル 2011 (第 20 回 参加者 300 名を超える)門脇厚司・森透
2011.6.25-26	実践研究福井ラウンドテーブル 2011(第 21 回)松本謙一・勝野 正章・木原俊行・三輪建二
2012.3.3-4	実践研究福井ラウンドテーブル 2012 spring sessions (第 22 回)(名称を変更する)
2012.6.23-24	実践研究福井ラウンドテーブル 2012 summer sessions(第 23 回) 参加者 450 名を超える 兼日本社会教育学会東海北陸研究集会

2013.3.2-3	実践研究福井ラウンドテーブル 2013 spring sessions(第 24 回)教師教育改革コラボレーションとの共催
2013.6.29-30	実践研究福井ラウンドテーブル 2013 summer sessions(第 25 回) 11.30-12.1 実践研究東京ラウンドテーブル 2013winter sessions(明治大学) 2.8 宇都宮大学学校活性化フォーラム(宇都宮大学)1.25 実践研究ラウンドテーブル in 静岡(静岡大学)
2014.3.1-2	実践研究福井ラウンドテーブル 2014 spring sessions (第 26 回)参加者 550 名を超える
2014.6.21-22	実践研究福井ラウンドテーブル 2014 summer sessions(第 27 回) 11.8-9 教育実践研究フォーラム in 長崎大学、11.23 実践研究ラウンドテーブル in 静岡(静岡大学) 11.22 大阪教育大学 スクールリーダーフォーラム、12.6-7 実践研究東京ラウンドテーブル(明治大学) 2.14 宇都宮大学学校活性化フォーラム、3.7 教育実践福島ラウンドテーブル
2015.2.27-3.1	実践研究福井ラウンドテーブル 2015 spring sessions(第 28 回)参加者 700 名を超える
2015.6.26-28	実践研究福井ラウンドテーブル 2015 summer sessions(第 29 回) 11.21 大阪教育大学スクールリーダーフォーラム、11.23 実践研究ラウンドテーブル in 静岡(静岡大学) 11.28-29 教育実践研究フォーラム in 長崎大学、12.6 実践研究東京ラウンドテーブル(明治大学) 12.19 教育実践福島ラウンドテーブル、2.13 宇都宮大学学校活性化フォーラム、 2.19-20 実践交流ラウンドテーブル NARA 2015
2016.2.26-28	実践研究福井ラウンドテーブル 2016 spring sessions(第 30 回)参加者 800 名を超える 生徒ポスターセッションを開催
2016.6.24-26	実践研究福井ラウンドテーブル 2016 summer sessions(第 31 回)参加者総数 547 名 7.8 記念講演&シンポジウム(和歌山大学教職大学院ラウンドテーブル) 11.12 大阪教育大学スクールリーダーフォーラム、11.23 実践研究ラウンドテーブル in 静岡(静岡大学) 11.5-6 教育実践研究フォーラム in 長崎大学、12.10-11 実践研究東京ラウンドテーブル(明治大学) 2.10-11 実践交流ラウンドテーブル NARA 2015 2.11-12 宇都宮大学学校活性化フォーラム
2017.2.17-19	実践研究福井ラウンドテーブル 2017 spring sessions(第 32 回)参加者 800 名を超える 特別企画「中等教育特別フォーラム」「保幼小教育フォーラム」を開催。省察実践学会の発足
2017.6.23-25	実践研究福井ラウンドテーブル 2017 summer sessions(第 33 回)参加者総数 566 名 10.14 信州ラウンドテーブル(信州大学教育学部附属学校園)、10.15-21 マラウイラウンドテーブル 11.11 大阪教育大学 スクールリーダーフォーラム、11.11-12 教育実践研究フォーラム in 長崎大学 12.9-10 実践研究東京ラウンドテーブル(明治大学)
2018.2.22-24	実践研究福井ラウンドテーブル 2018 spring sessions(第 34 回)参加者総数 627 名
2018.6.22-24	実践研究福井ラウンドテーブル 2018 summer sessions(第 35 回)参加者総数 476 名 10.20 信州ラウンドテーブル(信州大学教育学部附属学校園)、10.23 マラウイラウンドテーブル 11.17-18 教育実践研究フォーラム in 長崎大学、11.22-23 教育実践研究フォーラム in 奈良 12.15 実践研究ラウンドテーブル in 静岡大学 12.22-23 実践研究東京ラウンドテーブル(東京学芸大学) 2.9-10 宇都宮大学教育実践フォーラム
2019.2.15-17	実践研究福井ラウンドテーブル 2019 spring sessions(第 36 回)参加者総数 930 名
2019.6.21-23	実践研究福井ラウンドテーブル 2019 summer sessions(第 37 回)参加者総数 426 名 9.28-29 札幌ラウンドテーブル、10.23 マラウイラウンドテーブル、 11.16-17 教育実践研究フォーラム in 長崎大学、11.9 教育実践研究フォーラム in 奈良、 12.15 実践研究東京ラウンドテーブル(明治大学) 2.8-9 宇都宮大学教育実践フォーラム
2020.2.15-16	実践研究福井ラウンドテーブル 2020 spring sessions(第 38 回)参加者総数 800 名程度 3.3-4 ウガンダラウンドテーブル
2020.6.20-21	実践研究福井ラウンドテーブル 2020 summer sessions(第 39 回)参加者総数 500 名程度 11.21 東京サテライト・ラウンドテーブル 11.21 関西ラウンドテーブル
2021.2.20-21	実践研究福井ラウンドテーブル 2021 spring sessions(第 40 回)参加者総数 550 名程度

2021.6.20-21	実践研究福井ラウンドテーブル 2021 summer sessions(第 41 回)参加者総数 560 名程度 11.13 東京サテライト・ラウンドテーブル 11.21 協働探究ラウンドテーブル奈良 2021
2022.2.20-21	実践研究福井ラウンドテーブル 2022 spring sessions(第 42 回)参加者総数 660 名程度
2022.6.18-19	実践研究福井ラウンドテーブル 2022 summer sessions(第 43 回)参加者総数 640 名程度 8.4 宮古島ラウンドテーブル 11.26 東京ラウンドテーブル
2023.2.18-19	実践研究福井ラウンドテーブル 2023 spring sessions(第 44 回)参加者総数 660 名程度
2023.6.17-18	実践研究福井ラウンドテーブル 2023 summer sessions(第 45 回)参加者総数 560 名程度 8.25 岐阜ラウンドテーブル、10.28 信州ラウンドテーブル 2023(信州大学教育学部附属長野三校研究会) 11.18 東京サテライト・ラウンドテーブル 2023 11.18-19 教育実践研究フォーラム in 長崎大学、11.23 奈良ラウンドテーブル 2024.1.27 岐阜ラウンドテーブル
2024.2.17-18	実践研究福井ラウンドテーブル 2024 spring sessions(第 46 回)参加者総数 980 名程度

福井大学連合教職大学院が実践する教育改革グローバル・コミュニティへの誘い ラウンドテーブルの広がりと深まりを通して

福井大学連合教職大学院教授 木村 優

新しいミレニアムが幕をあけたばかりの 2001 年 3 月、教師教育にかかわる 20 名程の実践者・研究者が福井に一堂に会し、互いの教育実践研究を交流し合う研究会が催されました。この研究会のテーマは「教師の実践的力量形成をめざして」でした。このテーマのもとで解き放たれた熱い議論が、現在、福井大学連合教職大学院が毎年 2 月と 6 月に開催している実践研究福井ラウンドテーブルを生み出しました。

あれから十数年間、福井大学連合教職大学院は福井県内外と国内外の学校や教育機関との交流・往還を積み重ねてきました。そして、21 世紀の教育の実現に向けた学校と教師の挑戦を支援すべく、実践研究福井ラウンドテーブルを大黒柱にして実践コミュニティ¹を耕し続けてきました。

実践研究福井ラウンドテーブルでは会を重ねるごとに、参加者の実践報告が多様な色彩を帯びています。ラウンドテーブルの創成期には数人の教師たちによる実践報告に限られていました。しかし現在では、教師の教育実践の報告や学校改革の挑戦過程から、教育研究者による学校との協働研究、医療・福祉における省察的实践への挑戦、学生・院生の大学（院）におけるプロジェクト学習の展開、地域の人々による学校・家庭の教育支援、海外学校での新しい教育実践への挑戦、そして、小中高生によ

る自らの学びの軌跡についての報告に至るまで、多彩な実践が毎回のラウンドテーブルで交流されているのです。

この間、教育研究の飛躍的な前進を足がかりとしながら、「教育の質保証」と「学びの転換」を目指したさまざまな施策が矢継ぎ早に打たれるようになりました。アクティブ・ラーニング、チームとしての学校、コンピテンシー・ベース、カリキュラム・マネジメント、主体的・対話的で深い学び等々といった新しい改革用語が流布するように、学校と教師、そして子どもたちには実に多くの変化が求められています。これらの求めは、超スマート時代(Society5.0)、超 AI 時代、VUCA² ワールド等と呼ばれる新しい時代における、あらゆる個人とすべての社会の幸福を実現するための、私たち人類の挑戦の現れと言えるでしょう。

このような変化の激しい時代の教育改革期では、学校、教師、子どもたちの豊かな学びと確かな育ちをサポートする機構が必要になります。学校も教師も子どもも、それぞれが孤立するのではなく、つながり合い、支え合い、協働することで変化に向けた挑戦が可能になるのです。そこで、福井大学連合教職大学院は現在、21 世紀のあらゆる実践者、研究者、そして子どもたちの挑戦を支え促すための省察的機

構³としての実践コミュニティとして成熟を遂げようとしています。

省察的機構としての実践コミュニティは、そのコミュニティに参加するメンバーの、文字通り「実践の省察」を支え促すことを最重要のビジョンとして描きます。このビジョンを基盤とした実践研究福井ラウンドテーブルでは、そこに参加する日本全国・世界各地の実践者や研究者は当然、それぞれ福井大学連合教職大学院とは異なるコミュニティ、あるいは複数コミュニティに属していて、それぞれのコミュニティの中で変化を生み出す新たな実践に挑戦しています。つまり、実践研究福井ラウンドテーブルは、イノバティブ（革新的）なローカル・コミュニティが集合する大きなコミュニティの「坩堝（るつぽ）」なのです。

もしも、このコミュニティの中で数多くあるローカル・コミュニティがイノバティブな実践をベースにして結びつき、そこでコミュニティ間のネットワークが広がり、協働が加速すると、いったい何が起きるのでしょうか。それはおそらく、誰も見たことのない新しい知の創造であり、新しいかかわりの現れです。この新しい「知」や「かかわり」のダイナミクスが大きくなるほど、広がるほど、現代社会を取り巻く困難や未来社会に予測される問題を突破するいくつかの「ソリューション（解）」が生み出される可能性が高まります。ただし、「知」と「かかわり」のダイナミクスを大きくし、それらのイノベーションの質と価値を深めるためには、「戦略」が必要になります。ただ指を咥えて待っているだけでは、ダイナミクスやイノベーションは起こらないのです。

福井大学連合教職大学院では、これまでの実践研究福井ラウンドテーブルの展開で結びつきを強めたいくつかのコミュニティと連携して、分散型コミュニティのデザインに着手し始めました。もしも、複数のローカル・コミュニティが共通の理念やビジョンのもとで、「実践し省察するコミュニティ」に昇華することができれば、そして、そこで互いの課題や問題を見つけ出し、それらの解決策を考え出して共有可能な「知」を蓄積することができれば、それぞれのコミュニティが分断することなく連動して各地の「挑戦」を支え合い励まし合うことが可能になると考えたためです。

すなわち、日本全国・世界各地にあるローカル・コミュニティを結びつけて、各コミュニティの相互作用による変化を生み出すために、複数の境界をま

たいでメンバーが学び合うことができる分散型のコミュニティ構造をデザインしていくのです。福井大学連合教職大学院の分散型コミュニティへの挑戦とはつまり、現代社会と未来社会に生きるすべての人々の学びと育ちを支える、教育改革のグローバル・コミュニティを築く戦略なのです。

2014年度から、福井大学連合教職大学院との連携協働に基づき、長崎、大阪、静岡、東京、宇都宮、福島でラウンドテーブルが開かれるようになりました。その後、ラウンドテーブルは奈良や長野でも産声をあげ、各地の学校の校内研修にも広がっていきます。2017年度には福井大学連合教職大学院と JICA との連携を基盤として、アフリカのマラウイでラウンドテーブルが始まりました。日本各地そして世界のラウンドテーブルで引き出されはじめた教師たちの教育への熱誠、子どもたちの学びへの希望、そしてすべての人々の幸福への追求が、新たな省察的機構としての実践コミュニティを各地に創発していくことになることでしょう。

福井大学連合教職大学院ではこれまでも現在も、私たちのコミュニティ、そして分散型のグローバル・コミュニティに参加くださるあなた（ピア）を求めています。ぜひ、私たちとのかかわりを通して、そして実践研究福井ラウンドテーブルを通して、21世紀を革新する教育のあり方についてともに考え、すべての人々が幸福を追求できる未来社会をともに築いていく、この挑戦に多様多層に同行いただけると幸いに思います。

¹ あるテーマについての関心や熱意等を共有して、それぞれが所属する分野・領域の知識や技能を相互に持続的に交流し、深めていく集団や組織のこと（ウェンガー・マクダーモット・スナイダー, 2002）。

² 現代社会の特徴を表す4つの言葉：Volatility（不安定）、Uncertainty（不確実）、Complexity（複雑）、Ambiguity（曖昧）の頭文字をとった造語。

³ コミュニティの組織学習を支え、コミュニティのメンバーの実践の省察を励ます組織＝機構のこと（ショーン, 2017）。

Archive

— アーカイブ —

実践研究福井ラウンドテーブル 2022 Summer Sessions と、ラウンドテーブル 2023 Spring Sessions に参加していただいた方の報告を、Newsletter No.162 (2022.08.22) と No. 168 (2023.04.07) からご紹介いたします。※ご所属は当時のものです。

Newsletter No.168 (2023.04.07) より

初めてのラウンドテーブルで感じたこと

長野県東信教育事務所 指導主事 山浦 光雄

福井大学ラウンドテーブルに、初めて参加させていただいた。

〈ラウンドテーブルが始まる前の気持ち〉

- ・他県の方、校種や業種が違う方と出会うこと、話すこと、緊張するな。
- ・指導主事という、先生方とはまた違う職種のことを、周りの方にわかってもらえるようにうまく話せるだろうか。
- ・1人あたり100分も時間が割り振られるとのこと。そんなに間が持つのだろうか。

〈ラウンドテーブルを終えて 今の気持ち〉

- ・なんと濃密な約5時間であったことか。お互いに語り合い続けた、あっという間の5時間だった。
- ・初めて会う方に、こんなに自分をわかってもらえるのだな。そして、初めて会う方に、自分はこんなに共感できるのだな。
- ・職種や校種が違う方に伝えようとする、その方たちにわかるように「かみ砕いて」話したり、「たとえて話す」ような自分が出てくるのだな。
- ・自分の営みや気持ちをこうしてまとめる、人に話す、感じたことをお聞きするってとても大切な機会だな。
- ・自分の輪郭が前よりはっきり見えた感じがする。そして、明日からまた、自分の仕事を大切に、がんばっていききたいと思える。

福井県の小学校教諭A先生は、子どもたちの活動を、自分の思い描く方向へ「引っ張ろう」としてしまいう自分自身に、何度も立ち止まり、時に待ち、時

に子どもたちに問いかけながら、子どもたちと共に「健康運動づくり」に取り組んできたことを語られた。自分も小・中の教師として、幾度となく同じ悩みを感じてきたので、その悩みに強く共感したことをお伝えすると共に、A先生の「問いかけることで、子ども自身が再度深く考えることを促す」在り方に学んだことをお伝えした。

石川県の私立高校のB先生は、学習への意欲の面で課題を感じる、クラスの2人の生徒さんの力になりたいと思い、面談を繰り返してきたことを語ってくださった。高校の先生が、自分のことのように自身の進路について共に考え、面談を繰り返してくださること、なんて幸せなことなんだろう、とお伝えし、さらに、小学校に比べ、中学校や高校では、評価がペーパーテストの点数に一元化されがちであることにもあらためて気づき、そのことを話題にした。

うまく伝わるか心配だった、指導主事としての数年間を振り返った自分の発表を、同じグループの方々は、うなづきながら、親身になって聞いてくださった。そして、「そういうふうに移り添って授業を見てもらえたら、がんばれるかも」「自分がしている教師ってすばらしい仕事なんだなって、あらためて思えた」と伝えてくださり、ものすごく力をいただいた。また、会の最後に大学生Cさんが、「やっぱり、先生になりたいと思いました」と笑顔で語られていた姿がとても印象的で、高校生・大学生も参加しているこの会の意義を感じた。

このように、「力をいただける」ラウンドテーブル、「ぜひまた参加したい」と感じています。こうした場を継続して設けてくださっている福井大学の皆様に、感謝申し上げます。ありがとうございました。

ラウンドテーブル・クロスセッションの醍醐味

福井大学教育学部附属幼稚園 大野 喜美恵

福井ラウンドテーブルの最新で幅広い内容は、とても刺激的で1日目でも十分お腹いっぱいになる。2日目も参加したのは10年程前、消化不良に加えて脳みそも沸騰、ふらふらになって帰途についた。以来、1日目は参加しても、2日目に参加する勇気は到底持てなかった。今回参加したのは「メインディッシュが来る前になぜかテーブルを後にしてしまうようなもの」(木村優 No. 167)という喩えに心ひかれたからである。年を経た今なら、その醍醐味を味わえるかもしれない。

当日最初に半原先生が自身の言葉で語られた。「会を回そう、場を調整しようとの思い(企み)は必要ないこと。質問や意見をグッとこらえると報告者からそれをしのぐものが出てくること。短い応答やゴールを目指した話し合いに慣れているが、より高度なところへチャレンジすること。自分の言葉を探りながら長いチャレンジの中で、見えてこなかった光景が見えてくる、それがその方にとって意味ある語りとなる」のっけから釘を刺された気がした。聴くとは能動的な行為であり、限られた時間の中で話し手に反応することをよしとしてきた自分には、なかなか難しい。意気込まず、ゆるやかなコミュニティの一員になれたらいいと思った。

以下、3名の実践から浮かび上がってきた共通点と印象的な語りについて記す。

- 1 自身の固定観念を外し、子どもの思いを知り、それに応える中で子どもは主体性を発揮する。

環境が変わった時、これまでの方法が通用せず、壁にぶちあたる。打開するにはこれまでの考え方に

捉われず、目の前の子どもを見て、今必要な支援、求める環境を整えること。子どもはやりたいことなら自ずと主体的になる。

- 2 フラットに接し、子どもと一緒にやってみる中で、共に成長し合うコミュニティが生まれる。

普段から気軽に話せる雰囲気を作り、子どもを信じて待つこと。対話による合意形成で信頼関係を育む。探求は、教師が子どもと一緒に考え、楽しむようになった時、劇的に変わる。

- 3 人との出会いやつながりが新しい世界への扉を開き、自身を成長させる。

気軽に手を挙げた交換留学で東京から来られた園の先生は今や教職大学院生となり、伴侶と出会って福井に永住とのこと。ワクワクする思いで人生を楽しもうとする姿がまぶしく感じられた。

「2年前この場に参加するとは想像もしなかった」冒頭、皆が口にした一言。一期一会、語りの文脈や空気感はその時と場でしか味わえない。異質な他者と出会い、心動く場。既存の知識・情報だけでなくやりとりの中で生み出される価値に気づき、身体に落とし込む。メンバーの素のままに本音で語る清々しさに、自らの省察も促された。身近にこんな場があるといい。明日からは一人一人との対話を大切にしていきたいと思った。今回はクロスセッションを満喫し、何より楽しかった。関係者の皆様に心より感謝申し上げたい。

洞察力と同僚性

長野県上田市立長小学校 若林 史也

寄稿に際し、今一度、その場で走り書きしたメモを手に取り、眺めていた。五日が経過してもなお、赤字で書き留めたキーワードが発端となって、会場の息遣いが鮮明によみがえってきた。気が付くと、

リアルタイムでは咀嚼しきれなかった言葉同士が共鳴し合い、私は「洞察力」と追記していた。

正直、前日に2人のシンポジストを知り、戸惑った。「長野県と福井県」、「小学校と高校」、「教諭と教頭」、「ヤギとの暮らしと定時制での取組」のどの

項目をとっても、共通点として受け取れる要素を感じられなかったからだ。これは、コーディネーターの宮下正史先生に試されていると直感した。

幸いにも、ヤギと暮らす片原先生とは、昨年度までの同僚であり、ヤギに関わるやりがいも苦難も共有していた。ヤギのために、子どもたちのために、試行錯誤する片原先生はとにかく熱かった。それ故、目に見える形として表れる行為に一喜一憂している印象が強かったが、今回の発表からは洗練され研ぎ澄まされた片原先生がいたことに気付かされた。そこには、表面的な部分を含め、目では見えない部分を見抜く力が備わっているように感じた。

上記のように片原先生の事例を切り取ると、上中先生の紹介した事例が途端に結び付きを強めた。特に、「なぜ生徒が髪を染めるか、ピアスを開けるか。その背景を考えてやれ」との一言は、パッと目に付く外見ではなく、捉えにくい内面に神経を注ぐことを意味していると考えられた。

片原先生と上中先生の事例から浮かび上がる共通点は「洞察力」であると追記すると同時に、私は自身の教員人生の中で「洞察力」が発揮されていた場面を探っていた。

4年前、小学1年生の子どもたちとともにアサガオを育てていた私は、間引きを当然のこととして捉えていた。しかし、D児は「先生は、僕たちの赤ちゃんを殺す気ですか!」と激昂した。当時の衝撃は今でも忘れられない。動揺を隠せなかった私に、同僚がかけた言葉は「きっと譲れない何かがあったんだよ」であった。直接的ではなくとも、背景を読み解こうとする気持ちになるには十分な一言だった。その後、「蚕がせっかくつくった繭を切って、人間のために物を作るなんて間違っている」と語ったD児に対して、「Dくんは、人間の手によって自然が壊れていくことが許せないんだな」と感じられたのは、間違いなく同僚の一言のおかげだ。

私自身の事例も含めて、あらためて再考してみると、「洞察力」が鍛えられる背景には、他者である同僚との協働性が欠かせないことがみえてくる。また、あらためて Zone Aの主旨文を見ると、「21世紀型の学びを実践する教師の学習コミュニティを培う」ことをテーマとして、「教師協働の在り方」や「学校の当たり前を問い直す」ことが記されている。

今回、私は表題にある2つのメッセージを受け取ることができた。しかし、これはあくまでも私の教育観が前提となっている。願わくは、これを肴に語り合い、さらに自己を磨きたい。

Newsletter No.162 (2022.08.22) より

ラウンドテーブルに参加して

福井市文殊小学校 水野 涼子

昨年度末に「これが本当によかったのか」と、自分を問うひとつの出来事があった。たくさんアドバイスをもらい、自分自身も時間をかけて考え、これが良いだろうと決断したはずだった。事象としては学校運営のほんの一片である。しかし、これまでの自分の学校運営がどうであったか、関わった人それぞれの思いや背景を考え始めると、わからなくなってしまった。そんな時に、ラウンドテーブルの案内を目にし、以前に参加して得た感情を思い出した。久しぶりの対面での開催ということもあり参加をすぐに決めた。

初日は、学校・教育・地域を考える5つのアプローチでは、ZONE B教師教育：働き方改革と学び合う学校づくりー組織・コミュニティ・カリキュラム

のマネジメントーに参加。教師の質的向上と働き方改革の両立を目指しどのような組織づくり・運営をしていくのかについて改めて考えることになった。北川所長の提供話題では、現場における働き方改革やICT活用の「事例集」について、活用されていないことよりも「事例集」そのものを知らない教員が多くいることに驚いたが、実際のところ本校もそうであった。管理職の推進力の弱さとアプローチ不足に深く反省しながら、渡辺教務主任や入羽校長の実践を聞かせていただいた。どちらの報告も組織としてものごとを推進していくのには、メンバーの納得や合意が必要であり、管理職も含めた対話によって得られていくものだと感じた。もう少し話を聞きたいなと思っていた堤研究主任とは、その後同じグル

ープで話を聞かせていただいた。教師が楽しみながらできる研究は、必然的に授業改善や働き方改革につながっていた。また、今年度の研究が『非認知能力』に目を向けたことあたりを詳しく聞きたいと思っていたところ、ファシリテーターの渡邊先生がズバリ聞いてくださった。『非認知能力』は3つの資質・能力をより良い方向へと働かせる原動力であることを私自身が再確認し、それらを育成するための教科や子供の学びに沿った活動、ペーパーに頼らない評価の在り方について考えることができた。1日目の3人の先生方の報告からは、目標を実現しようとする強い意志とコミュニケーション力、思い切った決断力や行動力が、自走する組織を育てていくのだと学ばせていただいた。

2日目のラウンドテーブルは、対面型で参加。ファシリテーターは塩川先生。教職大学院の学生さんは、「主体的で協働的な学び」をどのように生み出すのかについて話されていた。メンターの学級経営から子供の発言しやすい雰囲気づくりが主体性を生み出しているというご自身の気づきや、子供自身が課題設定から探求的な学習へと主体的に学ぶことができるような単元構成された社会科の授業実践を聞かせていただいた。福井市内のこども園の先生の報告は、丁寧な「子供の見取り」による実践であった。

おにぎりの一口の大きさから支援の在り方や次につながる手立ての工夫、読み聞かせと散歩やおやつといった生活をつなぎ、自分でできることが増えたり思いやりが育くまれたりしたことを話された。お二人の教育者としての温かい思いに沿った実践報告は、大変楽しく、生き生きとした子供の姿が目に見え、感心することばかりであった。また聴き手を含めた参加者のやりとりは、丁寧に語り聴き合うことの心地よさを感じた。

参加して良かった。この一言に尽きる。あの出来事の私の在り方の是非はわからないし、これからも答えは出そうにない。しかし、自分の取り組みについて、振り返り捉えなおすチャンスをいただいた。また、同じ時間と場所を共有した参加者の学ぶ意欲に「やる気」と「勇気」もいただいた。

翌日、私の机の上に若い教員の提案授業の省察が置かれていた。読んでみると、授業への思い、参観者とともに子供を語り合うことで見えた子供の姿や自身の学び、このような機会を与えられたことへの感謝などが彼女自身の言葉でつぶられていた。早速、ラウンドテーブルへの参加を勧めた。謙遜する彼女に「ハードルが高いと思ったら、まずは聞き手で参加してみるといい。次は語りたくなるから。」と言った教頭も、ラウンドテーブル参加経験者である。

〈文脈〉の境界線を越えて「学びをつむぐ」場としてのラウンドテーブル

学校改革マネジメントコース2年 三保谷 遼(保善高等学校)

いまでこそ国語教育における協働・探究的な学びや、コンピテンシーに注目した学び、そしてそれを支える教師の変容や力量形成といった（おこがましい言い方になるが）教師教育に関心を寄せて、勤務校でのささやかな実践に挑んでいる稿者だが、福井で学ぶようになるまでは、熱心な（そしてつまらない）ある種の〈追っかけ〉だった。もっとも〈追っかけ〉といっても、芸能人の熱烈なファンとしての意味ではない。稿者が熱心に〈追っかけ〉ていたのは大学入試だった。もちろん、大学入学後の学び（いわゆる初年次教育の領域）や社会につながるような学びに対する関心もなかったわけではないし、できる限り心を寄せていた自負はある。しかし、やはり入試問題をドグマのように絶対視して、そこで求められる〈学力〉とメノマエの子どもたちの〈学力〉

をいかに架橋していくのか、ということが稿者の関心のなかで最も大きな領域を占有していたことは否めない。つまり、高校教育を大学入試のために矮小化して捉え、（皮肉な言い方になるが）大学入試を最大の目標とする逆向きのカリキュラム設計観が、福井で学ぶ前の稿者の教師としての〈文脈〉を規定していたといえる。

しかし、幼保小中高といった学校はもとより、さまざまな組織に所属する人びとが一堂に会するラウンドテーブルでは、そのような〈文脈〉を相対化せざるを得なくなる。ラウンドテーブルの末席を汚すようになって何年か経ったが、初めのころの稿者は、そのような〈文脈〉の相対化をめぐる苦しい記憶がある。いわば、〈追っかけ〉としてのアイデンティティをひとまず解体して、教育に携わる者として

の視野を広く構築しなおすこと、金子奨先生のことば¹を借りれば「内／外の、日常／非日常の境界線を越え」て、「別様の自分もありうることへの感受」という「脱自的な経験」としての学びを、稿者は福井で、そして幾度かのラウンドテーブルで重ねてきたのだといえる。では、稿者の〈追っかけ〉としてのアイデンティティはいかに解体され、教育に携わる者としての視野はいかに再構築されたのか。今の段階の仮の答えのようなものを書き連ねてみたい。

ラウンドテーブルでは多種多様な校種・職種における実践が語られる。学校、地域、福祉、医療……それらの実践をつなぐ脈絡などまるで存在しないかのように感じられることもあるかもしれない。だが、そこで語られるさまざまな年齢や立場、組織の〈文脈〉のなかにある子どもたちや大人たちの学びの諸相には〈文脈〉の違いを超越した共通項がある。一例を挙げるならば、今回のラウンドテーブルでは（稿者の関わった範囲においてのことではあるが）、さまざまな〈文脈〉のなかにも身を置く教師たちが多様な実践を出発点にしつつも、結果として一様に「見通しを立てる力」というコンピテンシーにつながるような気づきを語っていた。このような〈文脈〉を超越した学びの諸相に触れることで、大学入試という狭い〈文脈〉の外にある、オーセンティックな〈学力〉観へと稿者の関心の領域が開かれてきたといえる。

いわば、人が人と関わり合うなかで、よりよい学びと育ちがどのように展開されていくのか、自らの日常の〈文脈〉を越えた視野を獲得して、より長いスパンで教育そのもの（あるいは学びそのもの）を捉えかえすという学びを稿者はラウンドテーブルで経験してきた。いわば 15 歳から 18 歳の子どもたちの学びと育ちから、人そのものの学びと育ちへとパースペクティブが開かれていったという意味で、「高校教師」ではなく「（無印の）教師」としてのアイデンティティを稿者はラウンドテーブルを経て形づく

ってきたといえる。また、今回のラウンドテーブルでも様々なところで耳にしたことだが、教師の学びと子どもの学びは相似形をなすという。そのような新たな〈文脈〉のなかに身を置いてきたからこそ、教師の変容や力量形成といった、いわば教師教育をめぐる問題に関心を寄せている現在の稿者があるのかもしれない。

たとえ 3 歳の子どもだろうとも、15 歳の少女だろうとも、25 歳の青年だろうとも、良質で深い学びが実現されるときには、（この点はうまく私のことばで言語化する手立てが見つかっていないが）必ず通底する本質があると感じられてならない。そうしたエッセンスを丁寧に捉えて言語化し、稿者がいま関わっている子どもたちの良質で深い学びの実現につなげていくこと。そして、良質で深い学びに通底するエッセンスの看取を、稿者の大切な同僚たちの（教師としての）良質で深い学びの実現につなげていくこと。あと何度、ラウンドテーブルの末席を汚すことになるのかはわからないが、そのような使命感のもとに新たな〈文脈〉を〈追っかけ〉ていくとともに、より広く世の中の〈文脈〉を〈追っかけ〉、子どもたちと大人たちのより広い学びにつながるような実践を展開する教師としての力量を形成していくための省察の場として、さらには、教師教育に関心を寄せる者として「個人として改善しながらチームのパフォーマンスを高め、専門職全体を通して質を高めること²」につながるような学びの場として、ラウンドテーブル、そして福井での学びをつむぎつづけていきたい。

¹ 金子奨（著）『学びをつむぐ 〈協働〉が育む教室の絆』（大月書店・2008 年）

² アンディ・ハーグリーブス、マイケル・フラン（著）、木村優、篠原岳司、秋田喜代美（監訳）『専門職としての教師の資本 21 世紀を革新する教師・学校・教育政策のグランドデザイン』（金子書房・2022 年）

Newsletter は、教職大学院に関わる皆様の協力で作られています。
ご自身の実践や近況、提言や意見を投稿してみませんか。
修了生や関係機関の方の投稿也大歓迎です。
関心がある方は、編集担当(dpdtfukui_nl@yahoo.co.jp) までご連絡ください。

教職大学院 Newsletter

No.184

2024.7.06 発行

編集・発行・印刷

福井大学大学院

福井大学・岐阜聖徳学園大学・富山国際大学連合教職開発研究科

教職大学院 Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京 3-9-1 dpdtfukui@yahoo.co.jp
